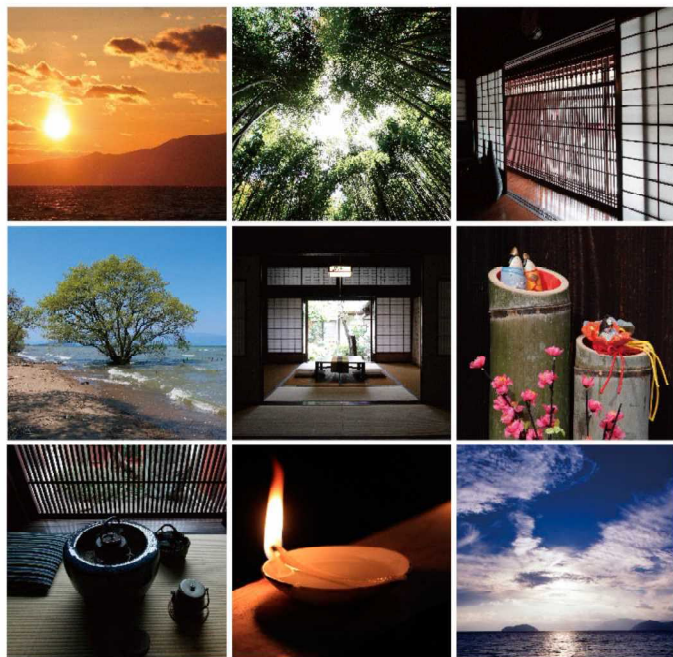


# 湖東ライフ読本

彦根市・愛荘町・豊郷町・甲良町・多賀町



湖東地域定住支援ネットワーク

2014.3

# 琵琶湖のほとりで暮らしてみませんか。

|              |    |
|--------------|----|
| 目次           |    |
| 扉            | 1  |
| 湖東地域MAP      | 3  |
| 湖東二市四町について   | 5  |
| 湖東ライフ紹介      | 6  |
| ① まちなか古民家篇   | 7  |
| ② 町屋店舗篇      | 13 |
| ③ 協力隊員篇      | 17 |
| ④ シェアハウス篇    | 21 |
| ⑤ Uターン篇      | 25 |
| ⑥ 地域活動篇      | 29 |
| 小江戸ひね町屋情報バンク | 33 |
| 「地域居住」のすすめ   | 34 |
| おすすめ体験宿泊     | 41 |
| ほっとSPOT      | 43 |
| 滋賀県湖東地域開会宣言  | 48 |
| 編集後記         | 49 |



目覚めたばかりの湖上をわたる風が、  
一日の始まりを告げる。  
繰り返す、繰り返す、湖岸を洗う波音に、  
揺り起こされるように、  
まちは、さとは、小さな時を刻み始める。

天守閣を仰ぎ見るまち彦根。技と伝統のまち愛荘。  
近江商人の名をとどめる豊郷。水清らかな甲良。  
神の住むまち多賀。

中山道で結ばれた湖東の歴史・文化・暮らしは、  
遠い昔から、  
そこに暮らす人々によって守り、継承されてきた。

鈴鹿山系から流れる命の水は、  
大上川、芹川、宇曾川、愛知川となって、  
湖へと注がれ、  
鼓動のようなさざ波は、終わりのない子守歌のように、  
いつまでも、いつまでも歌い続ける。

やがて茜色の雲と夕映えが辺りを支配し、  
湖が深い藍色に染まるころ、  
天空に満ちた星たちは、  
明日の訪れを約束するかのように瞬き始める。

輪廻転生。  
命の連鎖を育みながら、  
悠久の時を刻み続ける母なる湖。

あなたも、琵琶湖のほとりで暮らしてみませんか。



# 湖東地域MAP

彦根市・愛荘町・豊郷町・甲良町・多賀町



湖東の玄関口は、彦根。交通至便の湖東地域です。

JR琵琶湖線で京都まで49分。大阪から78分。名古屋までJR東海道本線で73分。  
 新幹線利用ならば、米原経由で京都25分。大阪から44分。名古屋まで30分。  
 (乗り換え時間は含みません)



●印は冊子掲載ページを参照。





## 湖東一市四町について

彦根市・愛荘町・豊郷町・甲良町・多賀町

# 湖東ライフ紹介

- ① まちなか古民家篇
- ② 町屋店舗篇
- ③ 協力隊員篇
- ④ シェアハウス篇
- ⑤ Uターン篇
- ⑥ 地域活動篇

### ■ 湖東地域の範囲

この冊子で紹介する滋賀県湖東地域は、彦根市・愛荘町・豊郷町・甲良町・多賀町の一市四町の範囲です。一市四町は、平成 21 年 10 月に「湖東定住自立圏の形成に関する協定書」を締結し、総務省がすすめる定住自立圏構想によって広域的な行政を展開しているエリアです。移住・定住への取り組みや、地域おこし協力隊員の募集など自治体間で連携しながら進めています。一市四町の概況は、次のとおりです。

■ 彦根市 (面積 196.8 km<sup>2</sup> (琵琶湖面積 98.6 km<sup>2</sup>を含む) 人口 11 万 2 千人)

彦根市は、彦根藩 35 万石の城下町として彦根城を中心に町を形成し、発展してきました。江戸時代、朝鮮からの親善使節が京都を経て彦根に宿泊し、中山道から江戸に向かうなど交通の要衝でもありました。中山道の宿場町であった鳥居本や高宮の街並みから当時の様子がうかがえます。現在の彦根は、JR 琵琶湖線、新幹線、名神高速道などの交通利便性を生かして、滋賀県湖東地域の商業、観光拠点となっています。

■ 愛荘町 (面積 37.9 km<sup>2</sup> 人口 2 万 6 百人)

愛荘町は、平成 18 年 2 月に旧秦荘町と旧愛知川町が合併し、誕生しました。中山道 66 番目の愛知川宿や旧愛知郡役所が置かれるなど、古くから人々の交流が盛んな地域でした。平成 25 年 10 月には名神高速道路に湖東三山スマートインターチェンジが完成し、交通利便性が高くなるなど、将来の発展が期待される地域です。

■ 豊郷町 (面積 7.8 km<sup>2</sup> 人口 7 千 5 百人)

豊郷町は、中山道の高宮宿と愛知川宿の間にあり、旧街道の街並みが残る中心部とその周辺に広がる農村集落で形成された町です。近江商人を数多く輩出した地域としての歴史を伝える文化的な資源が多く残されています。ヴォーリス設計の豊郷小学校旧校舎群を活用したまちづくりが全国に注目されています。

■ 甲良町 (面積 13.6 km<sup>2</sup> 人口 7 千 2 百人)

甲良町は、犬上川の水の恵みを生かし、稲作を中心とする田園地帯を形成してきました。平成 2 年からは「せせらぎ遊園のまちづくり」をテーマに、水と人と環境が調和した甲良町づくりを目指してきました。平成 25 年 4 月には、湖東地域唯一の道の駅「せせらぎの里こうら」(町営)をオープンし、国道 307 号線の交通条件を生かしながら元気のいい農村づくりを目指しています。

■ 多賀町 (面積 135.9 km<sup>2</sup> 人口 7 千 5 百人)

多賀町は、伊勢神宮とのつながりをもつ「多賀大社」の門前町として栄えてきました。今も、年間 170 万人の参拝者があり、初詣、春季例大祭、万灯祭など伝統行事は、町および商店街の活性化に切り離せない要素となっています。また、町の面積の 87 パーセントを占める森林資源の活用、獣害対策、中山間集落の保全などの課題に取り組みながら「21 世紀に生きる多賀人」をスローガンとするまちづくりを展開しています。

\*一市四町及び関係団体など、地域に関する主な問い合わせ先は、この冊子の 48 ページをご覧ください。

\*一市四町の人口は、滋賀県の人口と世帯数(平成 25 年 4 月 1 日)のデータをもとにした概数です。



彦根市



愛荘町



豊郷町



甲良町



多賀町



ほっと湖東ライフ① まちなか古民家篇

## 若き夫婦が実現したまちなか古民家暮らし 迫間勇人さん・加奈子さん

彦根市大橋町

歴史ある彦根仏壇の店舗が軒を連ねる『七曲がり仏壇街』は、中山道の高宮宿から彦根城下に通じる道筋にある。その名のおり幾度も折れ曲がりながら、古い木造家屋が作り出す街並みが、賑わった往時の風情を醸し出している。そのなかほどの大橋町に天保七年（一八三六年）に建てられた間口の大きな古民家がある。この家を購入し、母屋、土間、蔵を改修して新しい生活を始めた若い夫婦がいる。二人が幼いときに思い描いた古民家暮らしは、やがて大きな夢へと広がってゆく。



### 幼なじみがいなかった

迫間さんの子ども時代。父親の仕事の関係で転勤が多かったため、何度もの引っ越しを経験した。生まれは神戸、子供時代は千葉、中学校は大阪、高等学校は京都、大学は滋賀……。それぞれの土地で暮らし、成長してきた日々のことを振り返りながら、「幼なじみがいなかった」と迫間さんは語る。地縁的な繋がりがない環境で育った体験から、いつしか地域と関わりながら暮らす「軒家」「大きな家」に憧れを持つようになったという。

滋賀県立大学に入学した迫間さんは、環境・地域・人間について学ぶ環境政策分野を専攻し、城下町彦根のまちなかや中山道宿場町の名残をとどめる高宮・鳥居本ほかで地元の人達と交流してきた。また、ゼミを中心に活動する「NPO法人五環生活（\*1）」のメンバーとして



右上：中山道高宮宿から彦根城下に通じる「七曲がり仏壇街」の中ほどにある迫間さんの家。真新しい縦格子や現代的なメールボックスが街並みを若々しく蘇らせる。  
右下：リビングに面する中庭を改修し、洗濯物を干したり、子供たちが自由に遊び回れる多目的テラスとした。

左上：明るい陽が差し込む子供部屋。無垢の杉を床材に使うなど清潔感に溢れている。



様々なプロジェクトを立ち上げ、行動するなかから《からだ》を使ったものづくりに対する関心を深めていった。鳥居本の植栽体験、豊郷の酒造り体験……。初めて知る地域の文化や暮らし。こうして迫間さんは、その土地に根ざし、受け継がれてきた古民家を次第に意識するようになったのだという。

彦根のまちの歴史を今に伝える「仏壇通り」の一角で目にとまった古民家。若い迫間さん一家のホットな湖東ライフは、今、始まったばかりだ。

### もう一つ大切な出会い

長浜市の北部、豪雪で知られる余呉で、初めての米作りを体験した迫間さんは、自分の手で世話をし、育てたお米の美味しさに感動した。「うまいなあ……。迫間さんはこの米作りを通して、もう一つ大切な出会いを持つこととなった。今のライフスタイルを共に作り上げている奥様の





右ページ：母屋二階。学生時代にフルバンドでトロンボーンを吹いていた迫間さん。音楽仲間たちが集まり演奏するサウンドルームなど趣味の部屋に改装する計画だ。

右上：モダンテイストで改修したワンルーム蔵住居（二部屋）。真っ白な漆喰壁が健康な住まいを象徴する。

左：別棟の蔵住居外観。

右下：通りに面した空きスペース。迫間さんと友人の想いを込めたカフェに改修中。

左下：カフェにつながるギャラリースペース。アートをおして交流の輪が広がる。歓談する人たちのざわめきが聞こえてくるようだ。

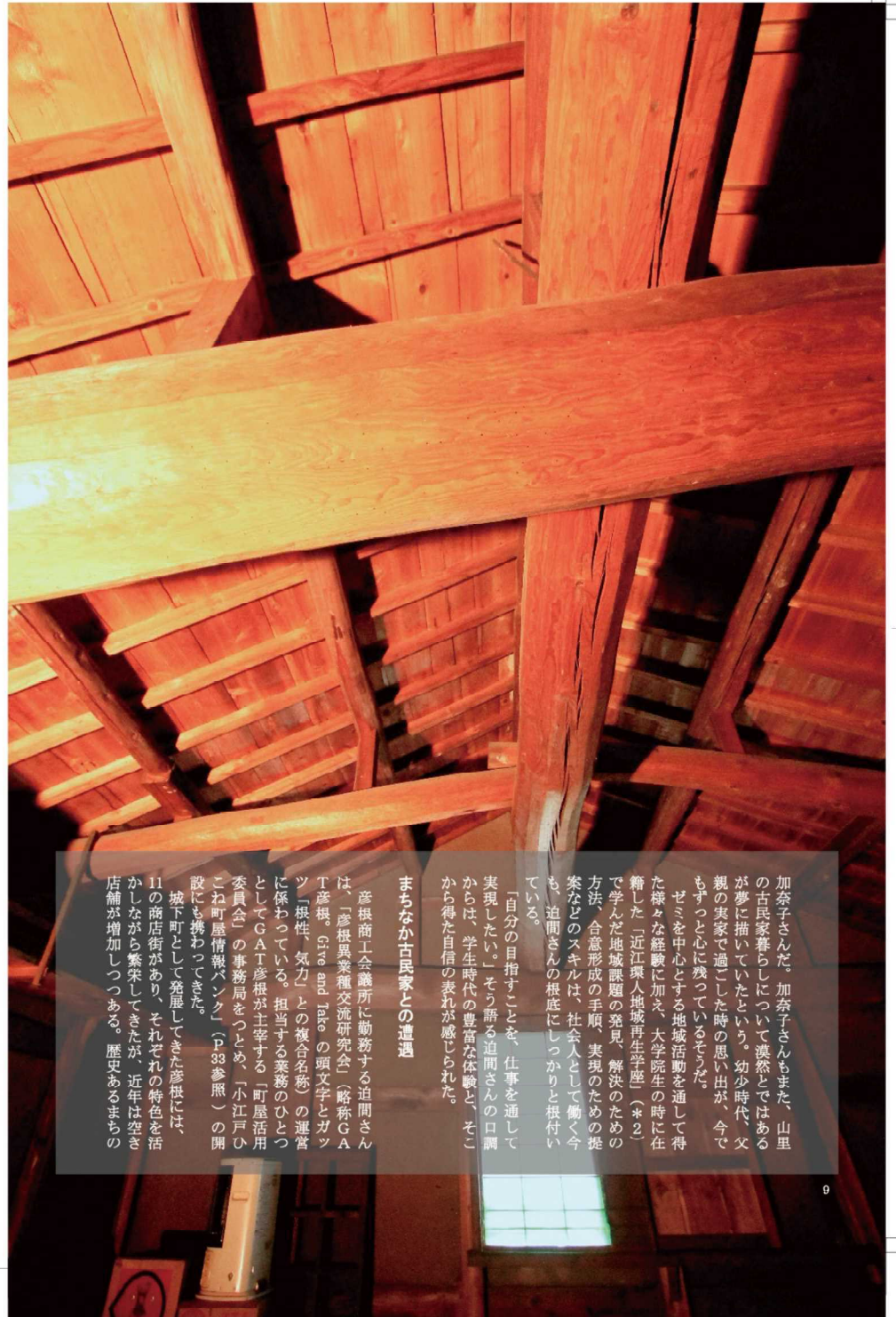


名残をとどめる古い木造の町屋が姿を消している現状について、関係者は心を痛めている。これらの建物をまちの財産として活用するためには、物件の所有者と探す人の仲介役の存在が重要である。担当する仕事として町屋活用に係わる一方、自らもまちなかの古民家を手に入れる機会を得て、住むこととなった。

**古民家で町や地域とつながる**

平成二十五年の二月、迫間さん家族は、念願の一戸建て、古民家に移り住んだ。敷地二二五坪、建築面積一三三坪、延べ床面積一四〇坪の大きな屋敷である。広い土間のある母屋には、部屋が七つある。引越すにあたって、キッチン、リビング、洗面所、トイレ、寝室、子供部屋など、奥様と二人のお子さんが暮らす空間の改修、改造を行った。母屋の二階部分および隣接する建物部分などは、現在改修中または、将来改修するスペースとして残っている。母屋の二階は、子ども部屋、趣味の部屋、ゲストルームを考えているという。また、土間に面する部屋の一部を貸しスペースとして活用など、計画は盛りだくさんだ。すでに開店している「fair shop THIRTEEN」は、迫間さんの友人が経営。「作り手」や「蔵元」に拘って仕入れたワインが数多く並んでいる。

「伝統工芸」の研究をしていた学生時代、後継者の問題などを考えるなかで、職人さんと若いアーティストとの出会い



加奈子さんだ。加奈子さんもまた、山形の古民家暮らしについて漠然とではあるが夢に描いていたという。幼少時代、父親の実家で過ごした時の思い出が、今でもずっと心に残っているそうだ。

ゼミを中心とする地域活動を通して得た様々な経験に加え、大学院生の時に在籍した「近江県地域再生学座（※2）」で学んだ地域課題の発見、解決のための方法、合意形成の手順、実現のための提案などのスキルは、社会人として働く今も、迫間さんの根底にしっかりと根付いている。

「自分の目指すことを、仕事を通して実現したい。」そう語る迫間さんの口調からは、学生時代の豊富な体験と、そこから得た自信の表れが感じられた。

**まちなか古民家との遭遇**

彦根商工会議所に勤務する迫間さんは、「彦根異業種交流研究会」（略称GAT彦根。G.A.T.は「G」の頭文字と「G」の「根性、気力」との複合名称）の運営に係わっている。担当する業務のひとつとしてGAT彦根が主宰する「町屋活用委員会」の事務局をつとめ、「小江戸のこね町屋情報バンク」（P33参照）の開設にも携わってきた。

城下町として発展してきた彦根には、11の商店街があり、それぞれの特色を活かしながら繁栄してきたが、近年は空き店舗が増加しつつある。歴史あるまちの



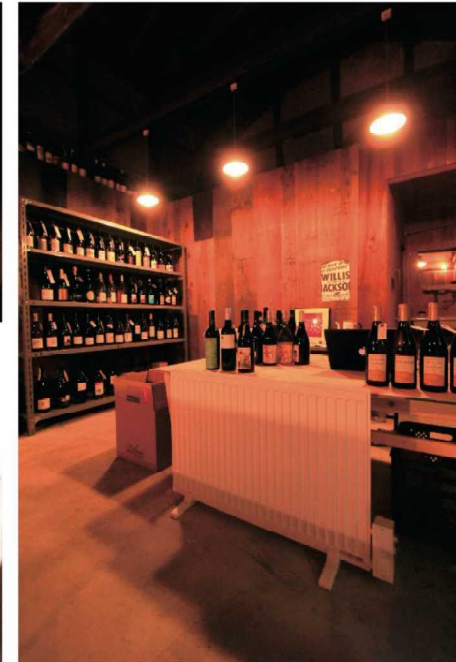


右上：ワインショップへ通じる土間の壁面アート。琵琶湖と七曲がりの街並みをモチーフとして制作。作者は、三浦さんの友人の丸倫徳さん。神奈川県在住のアーティスト、ペインター。  
 左上：約20坪の農園スペース。改修工事が終わるまでは手が回らないと話す若き夫婦。まちなかで菜園生活。都会生活では実現しない余裕の暮らしがここにはある。  
 左下：通りに面した土間。自転車、テント、テーブルなどファミリーお気に入りの道具が、楽しげに置かれている「生活土間」である。



**\*1 五環生活**  
 「五感+環境+暮らし」をテーマにスローライフを提唱し、実践する市民活動グループ。  
<http://gokan-seikatsu.jp/>

**\*2 近江環地域再生学座**  
 滋賀県立大学の人材育成プログラム。大学院学生と社会人を対象に、地域で活動するリーダーを養成する。  
<http://www.usp.ac.jp/japanese/campus/gakubu/in/ohmikanjin/ohmikanjin.html>



右：貸しスペースにオープンした『wine shop THREEE』（ワインショップスリー）の店内。THREEE（Eを3つ）はオーナーの三浦宏顕さんの名字から。作り手や蔵元にこだわって自らが厳選したワインがずらっと並び、質素ななかに酒蔵風テイストが溢れている。  
 左上：さりげなくテーブルを飾るランプ、ワイン、カード、グリーン。  
 左下：羽目板に取り付けたブリキの看板「3」。

と交流が大切だと気付いたという。「仏壇作りには、七つの技術が必要」。その技術ともの作りとの融合から新しい産業が生まれると迫間さんは考えている。「世代を超えて職人さんや地域の人たちが集うカフェを！」

迫間さんと友人の想いが込められたカフェはもうすぐ実現する。ほかにも衣装作家さんの工房、保育所、ギャラリーなど、プランは山積みだ。

古民家の魅力は、伝統的な日本家屋と木の素材にある。現代文明に慣れた現代人が、古民家のよさを活かして快適に暮らすためには、改修、改築に要する初期投資費用が必要となる。さらに住み始めた後に派生する修繕のための費用も考えなければならぬ。

「滋賀の古民家は家が大きく、とても良い木材を使っている。また土地が安く、いい町屋が安く手に入る。避けては通れないメンテナンスの費用を、最初から考慮して計画的に購入することを勧めます。」そう話す迫間さんは、ショップやカフェなどの貸しスペース、和室モダンテイストで改修した別棟の「蔵住居」の家賃をこれからの改修費にあてていくという。

堅実な計画のもとにスタートした迫間さんの古民家暮らしは、はや、一年が経過した。彦根まちなかで歴史ある店が軒を連ねる『七曲がり仏壇街』。そこからまた新しい人と人との繋がりが生まれる日は近い。

ほっと湖東ライフ② 町屋店舗篇

## 町屋店舗で商店街を元気にする

平野和俊さん・香陽子さん  
彦根市河原町

彦根まちなかにアンティーク感漂う、さりげない存在感を示す雑貨類やオシャレな洋服たち。店の中に足を踏み入れた瞬間、きっと誰もが空間、時間を共有したくなる店の名前は『Caro Angelo(カーロ・アンジェロ)』。こぢんまりとしたこの町屋を商店街で見つけ、迷うことなく購入を決めたと語るオーナー夫妻。カジュアルな感性溢れるフラワー&セレクトショップが、彦根で最も古い「リバーサイド橋本通り(橋本商店街)」を元気にする。

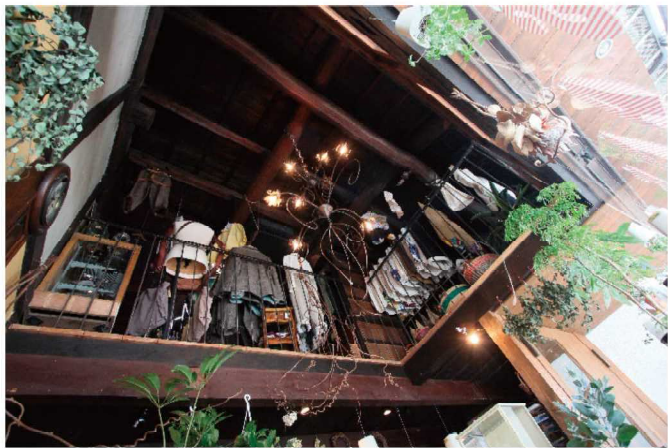


### 子供の頃の記憶

オーナーの平野和俊さんは大津市出身。人々が行き交い、活気に満ちた商店街。子供の頃の記憶を、平野さんは懐かしげ語る。その隣であいちを打つ地元彦根市出身の奥様、香陽子さん。今の仕事を始める前、保育士をしていた香陽さんは、店に並ぶ植物たちのように、ナチュラルで優しい女性だ。

平野さんは、もともと大津で花の流通に係わる仕事をしていたが、結婚を機に彦根に住むこととなった。そして、人影もまばらでシャッターがおりたままになっている商店街の様子を見て、思ったと言ふ。「もっとオシャレなまちなになるはずだ!」「もの売り買だけじゃなくて、人と人との付き合いを大切にしたい!」。

町屋や古民家が少しずつ姿を消してゆく町の様子も気になっていた。「古いもの



上: フラワーショップから二階のセレクトファッションフロアーを見る。木造の町屋店舗の深みある空間がカーロ・アンジェロらしさを醸し出す。  
右下: 色とりどりの季節の花は、奥様のセレクト。店内に溢れる花の香りがお客様を迎え入れる。  
左下: 明るい陽が射し込み、オリーブの緑が映えるパティオ。季節がよい時は、一日の終わりをここで過ごす。平野さんお気に入りのスポット。

を壊してしまつたらそれでおしまい。伝統や文化を今に伝える民家をなんとか利用できないのか?」そう考えていた平野さんの日にとまつたのは、四〇〇年の歴史を伝える彦根まちなか商店街にひっそりと残っている一軒の町屋だった。

彦根で育つた香陽子さんも、子供の頃のまちなか商店街の賑わいが懐かしいという。様々な店が建ち並ぶ銀座通り、中央通り、花しようぶ通り。子供心をかき立てた「えびす講」の屋台。しかし、成長するにつれ、いつの間にかオシャレなものは都会に求めるようになっていた。

### 直感で「買います!」

リバーサイド橋本通りで空き家となっていた店を初めて訪れたとき、家財道具などはまだ置かれたままになっていた。間口が狭く、奥行きのある町屋は、以前は、表具店だったそう。城下町がつくられた頃に建てられたのではと考えるほど古い建物だった。

目の前の空き家が、自分たちの店として生まれ変わる。そのことがすぐにはイメージできなかった香陽子さんだったが、その耳に飛び込んだのは「買います!」という平野さんの言葉だった。建物に足を踏み入れた瞬間にそう宣言した平野さんは、その時の自分を振り返り「直感だった」と語る。町家・商店・商店街:。目の前にある空き家は、平野さんが「夢」